

じょやもつで 除夜詣

まったくもって恥ずかしいことですが、除夜詣なることばがあるのを知らなかった。どんな言葉で、どんな意味かというところ。(住職記)

浅学非才とはこのことが。除夜詣なることばを知らなかった。

俳句歳時記には、冬の季語として「大晦日や節分の夜に翌年の歳徳(としとく)の方角の社寺に参詣すること」とあるから、珍しい言葉ではなさそう。歳徳の方角とは、最近流行の言葉でいえば恵方でしょうか。

不勉強ものに、趣のある言葉を教えてくれたのは、たまたま開いた読売新聞日曜版(平成24年4月14日付)です。歌舞伎役者の松本幸四郎さんの随筆でした。

観音様にお参りし、浅草寺の裏手にある弁天山で鐘をつけて前の「美家古」へ行ってすしをつまんだり、その年々によっては並木の「藪」で年越し蕎麦を食べるのが常だった。もう随分そんな大晦日も過ぎているが、蕎麦というと今でも浅草の除夜詣を思い出す。

*

役者さんらしい小粋なエッセイなのですが、いったい何時頃お参りするのが除夜詣なのか。世界最大の漢和辞典『諸橋大漢和』で「夜」を引くと「夜は暮也」とある。日没から一時間あまりを「夜」というらしい。それ以降は、五更(ごこう)と違って別の言い方がある。

だから、大晦日の七時頃までにするのが除夜詣。夕暮れまでにその年のことは全部すませてしまつて、閑かに年を越えて、元旦は早起きをする。この国の人は以前はそうしていたので

「味な話」と題された連載の3回目で、「楽屋の食事 蕎麦に限る」というテーマだったからお読みになった方もおられるのでは！

楽屋のこと、あるいは舞台の蕎麦屋の情景にうちくを傾けた後で、こんな記述があります。

*

女房も同じ氏子や除夜詣

播磨屋の祖父(初代吉右衛門)の句である。

この頃初詣はするが大晦日の除夜詣をする人は少なくなつたが、浅草の除夜詣は我が家のしきたりで、まだ三人の子供が小さかった頃は家族揃つ

しょう。昔は大晦日の深夜にウロウロしているなんて、怪しい人物だったにちがいありません。

除夜の鐘だつて、「夜」つまり日没から一時間以内に撞くのも正当ではないかなあー。実際、そうしているお寺もあります。私の知人が住職する千葉県佐倉市の寺では、いつもと同じ夕刻の鐘を百八ついで除夜の鐘にするという。なぜなら、深夜だと小さい子どもが撞けないから。

実をいうと、松岩寺でもそうしたいなあー、と数年前から思っているのですが、急に変えるわけにはいかないし、一年に一度くらい深夜に境内を解放するのも仕方ないか……。

というわけで、今年は少しばかり早く、十一時半頃からはつきはじめようか、と思つている年の瀬です。

(住職／博芳記)